D 日本書道史　人物・作品解説

※人物は、生没年に関わらず、主な作品を残した時代を優先して掲げた。

※人物の作品は、教科書本文に掲載のものを優先として、代表的なものを掲げた。

飛鳥時代より前

飛鳥・奈良時代

平安時代

鎌倉時代

南北朝・室町時代

安土・桃山・江戸時代

近代・現代

貨泉【かせん】

中国の新時代に流通していた貨幣（銅銭）。日本の古墳時代の遺跡からは、中国の前漢から後漢時代にかけての銅銭が発見されることがある。銅銭は篆書で鋳込まれ、中でも貨泉は新時代・天鳳元年（14）から10年程度流通していたものであることから、当時の日本と中国の交流をうかがうことができる。

後漢印（金印）【ごかんいん（きんいん）】1世紀頃

1748年、博多湾に浮かぶ志賀島で発見された金製の印。中国の歴史書である『後漢書』には、建武中元2年（57）に、光武帝が倭奴国王に「印綬」を与えたことが書かれており、印に刻まれた「漢委奴国王」の文字から、この印のことであると考えられている。日本に漢字が伝わったことを示す、最古の例の一つ。国宝。福岡市博物館蔵。

福岡市博物館：金印

石上神宮七支刀銘
【いそのかみじんぐうしちしとうめい】

「泰和四年銘七支刀」ともよばれる全長74.8cmの鉄剣に刻された銘。奈良県天理市にある石上神宮に伝わる刀の表裏に、合わせて61字の銘文が金象嵌されている。この刀は『日本書紀』に記された、百済から献上された「七枝刀（ななつさやのたち）」にあたると推測される。国宝。

石上神宮

江田船山古墳出土大刀銘
【えたふなやまこふんしゅつどたちめい】

1873年に、江田船山古墳に埋葬されていた棺から発見された全長90.9cmの鉄剣に刻された銘。刀の棟に75字の銘文が銀象嵌され、書風は隷書から楷書に近い字形である。判読できない文字があるものの、「稲荷山古墳出土鉄剣銘」と同じく「獲□□□□鹵大王（獲加多支鹵大王）」を雄略天皇とする説が有力である。ほかにも1音に対し漢字1字を当てた表記（万葉仮名）が人物名に見られ、仮名の誕生をうかがうことができる。太刀は朝鮮半島の金銅製品とともに発見された史料としても貴重である。国宝。東京国立博物館蔵。

ColBase：銀象嵌銘大刀

稲荷山古墳出土鉄剣銘
【いなりやまこふんしゅつどてっけんめい】

1978年に、埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した国宝の鉄剣に刻された銘。鉄剣の全長は73.5cm。剣身の表に57字、裏に58字の計115文字の銘文が金象嵌されている。銘文中の「辛亥年」を471年や531年とする説がある。「江田船山古墳出土大刀銘」「隅田八幡人物画象鏡銘」と同じく、1音に対し漢字1字を当てた表記（万葉仮名）が人物名に見られ、仮名の誕生をうかがうことができる。また、鉄剣が関東で発見されたことにより、当時の大和政権の勢力が関東地域にまで及んでいたとの考えもある。文化庁蔵。

埼玉県立さきたま史跡の博物館：金錯銘鉄剣

隅田八幡神社人物画象鏡銘
【すだはちまんじんじゃじんぶつがぞうきょうめい】

和歌山県橋本市の隅田八幡神社に伝わる国宝の青銅鏡に刻された銘。青銅鏡は直径19.9cmで、銘文に「癸未年」とあることから、443年または503年につくられたと考えられている。1音に対し漢字1字を当てた表記（万葉仮名）が人物名や地名に見られ、仮名の誕生をうかがうことができる。書風は「稲荷山古墳出土鉄剣銘」に近く、字形は中国の鏡に見られる文字に比べるとやや崩れ、素朴な雰囲気をだしている。

TOP

聖徳太子【しょうとくたいし】574-622

飛鳥時代の皇族・政治家。用明天皇の第２皇子、厩戸王。叔母の推古天皇の下、遣隋使の派遣などによって隋や朝鮮半島から文化や政治制度を取り入れ、冠位十二階や十七条の憲法の制定など、天皇を中心とした中央集権国家体制の確立を図った。仏教を厚く信仰し、四天王寺や法隆寺などを建立したといわれている。『法華経』の注釈にも努め、『法華義疏』や『勝鬘経義疏』『維摩経義疏』の「三経義疏」を著したとされ、特に『法華義疏』は近年まで太子の自筆とする見解もあった。

▶「法華義疏」（伝）飛鳥時代・615 年

『法華経』の注釈書。日本に現存する、紙に墨で書かれた肉筆最古の書。聖徳太子の書ともいわれているが確証はない。扁平で丸みのある字形で、細めの楷書に行書や草書も見られる。

法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘【ほうりゅうじこんどうしゃかさんぞんぞうこうはいめい】

飛鳥時代・623 年

法隆寺金堂に安置されている釈迦三尊像の光背の裏面に刻された銘文で、14 字 14 行、196 字が正方形に収められている。その構成や書風から、中国の南北朝時代の書の影響を受けていると見られる。釈迦像は聖徳太子夫婦の病の平癒などを願って作られたが、完成したのは太子が没した後の 623 年である。法隆寺や聖徳太子に関する研究の貴重な史料となっている。国宝。

法隆寺金堂薬師如来像光背銘【ほうりゅうじこんどうやくしにょらいぞうこうはいめい】

飛鳥時代

法隆寺金堂に安置されている薬師如来像の光背の裏面に刻された銘文で、全５行 90 字。「法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘」とともに著名である。飛鳥時代は、仏教とともに中国の南北朝時代の書風が流入していることから、碑文などにも広く六朝風の書が見られる。

宇治橋断碑【うじばしだんぴ】飛鳥時代・646 年

646 年に建てられたとされる日本最古の碑。京都府宇治市にある放生院に現存するが、もとの碑は上部３分の１程度である。宇治川の急流によって苦難していた人々が、橋の完成によって苦労が軽減されたことなど、宇治川に僧の道登が架橋したときの由来が刻されている。書風は中国の南北朝時代に見られる墓誌銘の楷書と酷似し、この時代の仏像の光背銘などにも同系の文字が見られる。重要文化財。

金剛場陀羅尼経【こんごうじょうだらにきょう】

飛鳥時代

隋時代に漢訳された経典を書写した、日本最古の写経。全１巻。麻紙に淡墨で界線が引かれ、文字は欧陽詢・欧陽通に見られる引き締められた整然とした楷書である。国宝。文化庁蔵。

文化遺産オンライン：金剛場陀羅尼経

那須国造碑【なすのくにのみやつこのひ】

飛鳥時代・700 年

栃木県那須郡の笠石神社に現存する碑。「日本三古碑」の一つ。19 字８行、全 152 字が刻されている。3.16cm の方形の中に、字間・行間ともに整然と配置されている。689 年、那須の国造であった那須直韋提が、評督（官職名）を賜り、700 年に亡くなったため、後継者が碑を建てて故人を偲んだことなどが記されている。中国の南北朝時代に見られる楷書の書風や笠石を置いた形状など、中国の影響を受けている。国宝。

多胡碑【たごひ】奈良時代・711 年

群馬県高崎市に現存する碑。「日本三古碑」の一つ。上野国の 14 番目の郡として、多胡郡が建郡されたことを記念して建てられた。和銅４年（711）の紀年が見られ、全６行 80 字が刻されている。中国の南北朝時代に見られる楷書の書風や笠石を置いた形状など、中国の影響を受けている。

高崎市文化財情報　上野三碑：多胡碑

多賀城碑【たがじょうひ】奈良時代・762 年

宮城県多賀城市に現存する碑。「日本三古碑」の一つ。141 字が刻されている。天平宝字６年（762）12 月１日の紀年があり、多賀城の修築を記念して

TOP

建立されたと考えられる。「壺の碑」ともよばれ、碑が発見された江戸時代初めから広く知られていた。中国の南北朝時代に見られる楷書の書風で書かれているが、「那須国造碑」と比べるとかなり直線的である。国宝。

多賀城市の文化財：国宝 多賀城碑

木簡類【もっかんるい】

文字などを墨書した短冊状の木片を木簡といい、奈良時代に書かれた木簡は、平城京や長岡京など全国の宮跡・京跡から出土している。メモのような簡単な内容や荷札、文字を学ぶために習字したもの、落書などがあり、『論語』や『文選』などの漢詩文も見られる。万葉仮名で書かれた和歌も多数出土しており、仮名の発達史料としても貴重なものである。中国の木簡のように紐で縛ったようなものはない。

e 国宝：平城宮跡出土木簡

聖武天皇【しょうむてんのう】701-756

文武天皇の皇子。妃は光明皇后。聖武天皇は唐の文化を取り入れ、国政の充実を図った。特に仏教に熱心であり、全国に国分寺・国分尼寺を建立し、東大寺の建立の際には大仏をつくった。また写経にも力を入れ、「一切経」や「金光明最勝王経」を書写させたことでも知られる。聖武天皇の真筆として「雑集」や、伝称筆者として「賢愚経（大聖武）」が知られている。

▶「雑集」奈良時代・731 年

聖武天皇の宸翰（自筆の書）。六朝・隋・唐時代の仏教に関する詩文 145 首を書写している。白麻紙が用いられ、細みの楷書に行書を交えて 1 行 18 字が字間・行間を均等に空けた形で書かれている。その書風は、王羲之や初唐の書法の趣がうかがえる。縦 27.7cm、長さ 21.42m の長い巻子本である。正倉院宝物。

正倉院：雑集

▶「賢愚経（大聖武）」（伝）奈良時代・740 年以降

聖武天皇の宸翰（自筆の書）として伝えられているが、確証はない。「大聖武」は、賢者と愚者についての 69 篇の話をまとめた『賢愚因縁経』を書写した「賢愚経」の断簡である。経典写経は通常 1 行 17 字で書かれるが、「賢愚経（大聖武）」は 12 字と文字が大きく堂々としている。「大聖武」は優れた手鑑の巻頭を飾ることでも知られ、穂先を利かせた力強く重厚な線を用い、やや扁平で端正に書かれている。線に抑揚があり、どっしりとしていて伸びやかな書である。

ColBase：賢愚経残巻（大聖武）

光明皇后【こうみょうこうごう】701-760

聖武天皇の皇后で、藤原不比等の三女。光明皇后も聖武天皇と同じく仏教に熱心であり、国分寺や東大寺の建立を聖武天皇に進言したとされる。聖武天皇の死後四十九日に遺品などを東大寺に献納し、その宝物を収めるために正倉院が建てられた。興福寺や新薬師寺など寺院の創建に携わるほか、医療施設である「施薬院」などを設置して人々の救済に力を尽くした。代表作に「楽毅論」や「杜家立成雑書要略」がある。

▶「楽毅論」奈良時代・744 年

王羲之の「楽毅論」を臨書したもので、光明皇后の真筆である。「楽毅論」は、中国の戦国時代の燕国で将軍であった楽毅という人を論じた内容で、王羲之の楷書では最も優れているものとされている。光明皇后の「楽毅論」は、起筆を強く打ち込み弾力を利かせた鋭く大胆な運筆で、結構よりも筆意を重んじ、躍動的で迫力がある。正倉院宝物。

正倉院：楽毅論

金光明最勝王経【こんこうみょうさいしょうおうきょう】奈良時代

「金光明経」の漢訳の一つ。奈良時代には、鎮護国家の思想として、仏教の力で国を護り保護するという政策がとられた。「金光明経」の教説と政治理念が結びつき、聖武天皇は全国に国分寺・国分尼寺を建立させ、そこに「金光明最勝王経」を安置させた。古代紫の料紙に金字で写経され、筆勢は謹厳で端正に書かれた、奈良時代を代表する写経である。「紫紙金字金光明最勝王経」ともいう。

ColBase：金光明最勝王経（国分寺経）

TOP

仏足跡歌碑【ぶっそくせきかひ】奈良時代

奈良市の薬師寺に伝わる奈良時代末期に建てられた歌碑。仏足石歌（仏足石歌体の和歌は五・七・五・七・七・七の6句38音からなる）21首が刻されている。万葉仮名で書かれた文字は大小や点画の長短は少なく、全体的に素朴な雰囲気が感じられる。国宝。

東大寺献物帳【とうだいじけんもつちょう】奈良時代

756年、聖武天皇の死後四十九日に光明皇后が遺品などを東大寺に献納した際の目録。品名や数量、形状などが5巻伝えられている。年代順に『国家珍宝帳』『種々薬帳』『屏風花氈等帳』『大小王真跡帳』『藤原公真跡屏風帳』と分かれている。中でも『国家珍宝帳』が有名であり、その中に「王羲之書法廿巻」とあることから、王羲之の書法が奈良時代に伝わっていたことがうかがえる。書写された文字も名筆であり、謹厳で端正な格調高い姿を見せている。正倉院宝物。

正倉院：国家珍宝帳

正倉院：種々薬帳

隅寺心経【すみでらしんぎょう】（伝空海）奈良時代

空海が隅寺（海龍王寺）に通い、発願・書写した「般若心経」であるという言い伝えから、この名がついた。空海の書といわれているが、確証はない。奈良時代には、多くの「般若心経」が書写された。文字はやや扁平で、引き締まった字形で書かれ、謹厳にして力強さが感じられる。

空海

ColBase：隅寺心経

正倉院仮名文書【しょうそういんかなもんじょ】

奈良時代・762年以前

正倉院に伝わっている文書で、その多くが万葉仮名で書かれている。当時は紙が貴重であり、不要になった公文書の紙背に、東大寺の写経所の事業に関係した内容が書かれているものが多く残されている。文字は草書で書かれ、当時の社会・経済の基礎史料であると同時に、仮名文字の発達をうかがうことができる。正倉院宝物。

TOP

最澄【さいちょう】767-822

日本の天台宗の開祖。804年に、遣唐使節に随行する留学生として唐に渡り密教を学んだ。後に親交をもつ空海も同年に唐に渡っているが、同じ船ではなかった。帰国後の806年、比叡山延暦寺で天台宗を開いた。最澄の書風は、王羲之の「集王聖教序」の影響を受けている。代表作に「久隔帖」や「請来目録」などがある。

▶**「久隔帖」**平安時代・813年

弘仁4年（813）11月25日付で書いた尺牘（手紙）で、「久隔清音」の書きだしからこの名がある。空海のもとで修行していた弟子の泰範経由で、空海に宛てた書状である。空海から贈られた詩に対して返事をするにあたり、その詩の内容などについて問い合わせをしている。現存する最澄の唯一の手紙である。王羲之の書法を貫いた格調の高さがうかがえる。国宝。奈良国立博物館蔵。

ColBase：最澄筆尺牘（久隔帖）

空海【くうかい】774-835

讃岐（現在の香川県）に生まれ、僧侶となった。延暦23年（804）に遣唐使船で唐に渡り、密教や書を学んだ。816年に高野山に金剛峯寺を創建し、真言宗の開祖となった。空海の書法は王羲之の書法をよく捉え、唐からの帰国後には唐の書法の影響も見られるが、これをさらに和様的な姿に発展させている。嵯峨天皇、橘逸勢とともに平安時代初期を代表する「三筆」と称されている。代表作に「聾瞽指帰」や「風信帖」「灌頂歴名」などがある。また、「隅寺心経」の伝称筆者でもある。

隅寺心経

▶**「聾瞽指帰」**平安時代・797年

儒教・道教・仏教の比較をした思想論を著している。唐に渡る前の書で、王羲之の書法の影響が見られ、力強い筆勢で行書を主体に、楷書や草書も使われている。空海の真筆としない説もある。国宝。高野山蔵。

高野山霊宝館

▶**「風信帖」**平安時代・812年頃

空海が最澄に宛てて書いた3通の尺牘（手紙）をつなげて1巻の巻子本にしたもの。その1通目が「風信雲書」から始まるので、「風信帖」とよばれている。2通目の「忽披帖」は「風信帖」よりも力強い書きぶりで、3通目の「忽恵帖」は流麗な草書体で書かれている。重心を低く構え、骨格がしっかりした重厚感のある運筆で書かれているが、抑揚の変化に富んだ手紙ならではの自然な趣も備わっている。王羲之や唐時代のさまざまな書法の影響が見られる。国宝。東寺蔵。

▶**「灌頂歴名」**平安時代・812-813年

812年から813年にかけて空海が高雄山寺で行った、密教の入門儀式である灌頂を受けた人名を記録した手控え（メモ）。最澄の名も見られる。行書に草書を交えた書風で書かれた卒意の書であり、削除の跡も見られる。空海の真筆としない説もある。国宝。神護寺蔵。

嵯峨天皇【さがてんのう】786-842

桓武天皇の皇子。幼少の頃から読書を好み、詩文や書に優れた。唐風文化に基づき、政治制度の整備や漢詩文、天台宗や真言宗といった仏教に力を入れた。嵯峨天皇の勅命により編纂された勅撰漢詩集として『凌雲集』『文華秀麗集』がある。空海と密接に交流があり、書も空海の影響を受けている。空海は、唐から持ち帰った書や詩文を嵯峨天皇に献上するなどしていた。嵯峨天皇の宸翰（自筆の書）に「光定戒牒」などがある。空海、橘逸勢とともに平安時代初期を代表する「三筆」と称されている。

▶**「光定戒牒」**平安時代・823年

最澄の弟子である光定が、比叡山・一乗止観院において菩薩戒を受けた際に嵯峨天皇が与えた証明書。楷・行・草書を交えて書かれた巻子本であり、欧陽詢と空海の書法の影響が見られる。国宝。延暦寺蔵。

橘逸勢【たちばなのはやなり】?-842

804年に最澄・空海らとともに遣唐使船で唐に渡り、在唐中は柳宗元に書を学んだといわれる。唐人は逸勢を「橘秀才」とよんだが、逸勢の真筆として確認できるものは伝わっていない。空海、嵯峨天皇とともに平安時代初期を代表する「三筆」と称されている。「伊都内親王願文」の伝称筆者でもある。

TOP

▶「伊都内親王願文」（伝）平安時代・833 年

伊都内親王が、母である藤原平子の遺言により、山階寺（現在の興福寺）に香灯と読経のお布施として、墾田などを寄進した際の願文。橘 逸勢の書と伝えられているが、確証はない。遣唐使によって伝えられた唐の書法の影響が見られる。朱で押された内親王の右手の手形も特徴である。抑揚をつけた軽やかな線と厚みのある線が混在し、変化に富んだ表情を見せている。御物。

有年申文【ありとしもうしぶみ】平安時代・867 年

藤原有年が、讃岐国司在任中の貞観 9 年（867）に作成した申文である。『讃岐国司解端書』ともよばれる。漢字と草書体の万葉仮名を合わせて表現した公文書である。真仮名（男手）から女手の仮名に発展していく過程を知ることのできる重要な史料であり、潤渇や連綿も見られる。当時、日常的に万葉仮名が用いられていたことが分かる。内容は、讃岐国那珂郡と多度郡に住んでいた一族から出された改姓の願いであり、讃岐国司であった有年が太政官に申し出た際に添えられたものである。国宝。東京国立博物館蔵。

ColBase：讃岐国司解（円珍関係文書の内）

紀貫之【きのつらゆき】（生没年不詳）

『古今和歌集』の撰者の一人で、「真名序」「仮名序」のうち「仮名序」で和歌を論じたことで知られる。貫之を筆者とする古筆は多いものの、確証はない。貫之の真筆は現存しないためその姿を知ることはできないが、藤原定家の『土佐（左）日記』の写本の最後に、貫之の筆跡を臨書したものが残されている。「高野切古今和歌集」「寸松庵色紙」などの伝称筆者とされる。

▶「高野切古今和歌集」（伝）平安時代・11 世紀中頃

現存する『古今和歌集』の写本のうち、最も古いもの。雲母を撒いた雁皮紙を使用している。もとは、全 20 巻の巻子本であったが、後に断簡（切）となり、豊臣秀吉がその一部の断簡を高野山に贈ったことから、「高野切」とよばれる。伝称筆者は紀貫之とされる。実際は、11 世紀半ば頃の 3 人による寄合書とみられ、その書風の違いによって第一種、第二種、第三種に分類されている。

▶「高野切第一種」（伝）平安時代・11 世紀中頃

ゆったりとした字形で、伸びやかな線で優美に書かれている。自然な墨継ぎによる潤渇や線の太細の変化が、紙面に奥行きを与えている。寄合書では、最初と最後を優れた能書が書く習わしがあり、「高野切第一種」の筆者は巻第 1 と巻末と巻第 20 を書写していることから、当代随一の能書であったと考えられている。

五島美術館

▶「高野切第二種」（伝）平安時代・11 世紀中頃

筆を右に傾けた側筆が特徴で、抑揚の変化に富んだ力強い線質が特徴である。強調された斜めの連綿線など「桂本万葉集」などと同筆と見られることから、筆者は源 兼行と推定されている。

▶「高野切第三種」（伝）平安時代・11 世紀中頃

「高野切古今和歌集」の中でも、懐を広くとった単純明快な字形と丁寧に書かれた点画が特徴であり、伸びやかで清らかな線質で書かれている。筆脈を意識した多様な連綿で構成され、流れるような豊かな表現になっている。

ColBase：古今和歌集巻十九断簡（高野切）

▶「桂本万葉集」（伝）平安時代・11 世紀中頃

『万葉集』全 20 巻を書写した巻子本であったと考えられており、現在はその一部が残されている。「元暦校本万葉集」「藍紙本万葉集」「天治本万葉集」「金沢本万葉集」とともに、平安時代の「五大万葉集」の一つである。伝称筆者は紀貫之とされるが、「高野切第二種」「関戸本和漢朗詠集切」と筆跡を同じくすることから、筆者は源 兼行と推定されている。色鮮やかな染紙に、金銀泥や鳥や蝶、草花などが描かれ、万葉仮名と仮名が合わせて書かれている。筆を右に傾けた側筆や、抑揚の変化に富んだ力強い線質が特徴である。

五島美術館

▶「寸松庵色紙」（伝）平安時代・11 世紀後半

「継色紙」「升色紙」とともに「三色紙」とよばれ、平安時代を代表する散らし書きの名筆である。京都大徳寺の龍光院の塔頭、寸松庵に伝えられたことから、この名でよばれている。もとは約 13cm 四方の粘葉装の冊子本であったが、分割され色紙形となっ

TOP

ている。伝称筆者は紀貫之とされる。『古今和歌集』の四季の歌を書いたもので、染紙や亀甲、草花などの型文様を雲母で刷りだした舶載の唐紙を用いている。行に高低の変化をもたせたり、左右や上下に分割したりした、多様な散らし書きの様式を見ることができる。

遠山記念館

ColBase：寸松庵色紙「としふれば」

ColBase：寸松庵色紙「秋のつき」

小野道風【おののとうふう・みちかぜ】894-966

小野妹子の子孫で、博学で能書だった公卿の小野篁の孫。遣唐使が廃止された年に生まれた。和様の書を創出した人物として、藤原佐理・藤原行成とともに「三跡」と称されている。それまでの王羲之を主流とする書風を骨格としながら、転折に丸みのある芳醇で日本的な趣のある書風を打ちだした。代表作に「屏風土代」や「三体白氏詩巻」「玉泉帖」などが知られている。「秋萩帖」「継色紙」「本阿弥切古今和歌集」の伝称筆者でもある。その筆跡を「野跡」という。

▶「屏風土代」平安時代・928 年

醍醐天皇の命により、内裏で新調する屏風の色紙形に道風が書を担うこととなった。「屏風土代」はその屏風に漢詩を揮毫する際の下書きで、道風 35 歳の書である。文字の脇には注記が見られ、清書に向けて字形を検討している様子がうかがえる。行書体を主体に草書体を交え、下書きながら端正に書かれている。厚みのある線質で転折には丸みがあり、温かみや内に秘めた力強さが感じられる。国宝。皇居三の丸尚蔵館蔵。

ColBase：屏風土代

▶「秋萩帖」（伝）平安時代

平安時代の草仮名の代表的な遺品として知られている。色替わりの染紙を継いだ、縦 24cm、長さ 842.4cm の長い巻子本である。薄藍色の第 1 紙「安幾破起乃」の文字で始まることからこの名がつけられている。和歌のほかに、王羲之の尺牘（手紙）が写されている部分もあり、この時代に王羲之が尊重されていたことが分かる。丸みを帯びた柔らかい線筆で、優美で穏やかな書風である。連綿は少なく、多くは放ち書きで書かれている。和歌を 4 行で書き、詞書は省略されている。草仮名の字姿から 10 世紀の書とする説や、12 世紀の書写とする説などがある。小野道風の書と伝えられていたことで、江戸時代には拓本が手本として用いられていたこともあるが、筆者の確証はない。国宝。東京国立博物館蔵。

ColBase：秋萩帖

▶「継色紙」（伝）平安時代・10 世紀中頃～ 11 世紀後半

「寸松庵色紙」「升色紙」とともに「三色紙」と称され、散らし書きの代表的な古筆。『万葉集』と『古今和歌集』の歌から、四季・恋・賀の歌を書いたもので、縦 13.6cm、横 13.4cm の粘葉装の冊子本であったが、現在は断簡として残されている。伝称筆者は小野道風とされる。紫・茶・緑・藍・黄の染紙を贅沢に使用している。和歌 1 首に対して 2 枚の料紙を用い、右ページに上の句、左ページに下の句を書き、見開きで 1 首とした体裁のものが多く見られる。行の長さの変化や行間、行の傾きなどで美しい空間を作りだしている。

ColBase：継色紙（われみても）

▶「小島切」（伝）平安時代・11 世紀後半

「斎宮女御集」を書写した断簡で、もとは粘葉装の冊子本であった。伝称筆者は小野道風とされる。藍や紫に染めた繊維を漉き込んだ飛雲の料紙に、細めの線で繊細に書かれ、優美な連綿線を見せている。江戸時代に本阿弥光悦の弟子の小島宗真が所蔵したことから、この名でよばれている。

ColBase：斎宮女御集断簡　小島切「秋をへて」

▶「本阿弥切古今和歌集」（伝）

平安時代・11 世紀後半～ 12 世紀前半

『古今和歌集』の写本で、安土・桃山時代から江戸時代初期に活躍した本阿弥光悦が所有していたことから、この名でよばれている。もとは 20 巻の巻子本であったが、現在はその一部と断簡が残されている。伝称筆者は小野道風とされる。夾竹桃の文様を雲母で刷りだした唐紙などに書かれた。文字の大きさは小さめで、結びの部分に円みがある。筆の弾力を生かして軽快な運筆で書かれている。また、和歌 1 首を 2 行で書くことを主体としながら、行頭の高さを変化させたり、1 行や 3 行で書いたりと自由な構成を見せている。

TOP

京都国立博物館：古今和歌集 第十二残巻（本阿弥切）

藤原佐理【ふじわらのさり・すけまさ】944-998

太政大臣藤原実頼の孫で、公任の従兄弟。若いうちから能書として名高かったが、遅刻、職務放棄、礼節を欠くなど問題行動が相次いだことから、『大鏡』では「如泥人（だらしない人）」と酷評されてもいる。小野道風、藤原行成とともに「三跡」と称される。真筆には「離洛帖」「国申文帖」「詩懐紙」などがあるが、全て漢字である。その筆跡を「佐跡」という。

▶「離洛帖」平安時代・991

正暦 2 年（991）、太宰府の役人に任官した藤原佐理が、赴任の際に摂政の藤原道隆に挨拶を怠ったことへの取りなしを甥に頼む書状。書き出しが「謹厳離洛之後」で始まるため「離洛帖」とよばれ、草書で自由に書かれている。これに限らず、佐理の書の多くは卒意の書、しかも詫状などである。国宝。荏原 畠山美術館蔵。

荏原 畠山美術館

藤原道長【ふじわらのみちなが】966-1027

摂政太政大臣で、一条、三条、後一条の 3 代にわたって左大臣や内覧を歴任し、摂関家の全盛時代を築いた。道長の真筆として日記の「御堂関白記」があり、当時の貴族社会を知る重要な史料となっている。

▶「御堂関白記」平安時代・10 世紀末頃～ 11 世紀前半

988 年から 1021 年までの藤原道長の日記で、摂関政治のことや貴族の日常が具注暦（季節や年中行事、また毎日の吉凶などが漢文で記されている暦）に記されており、当時の社会や文化を知ることができる貴重な史料である。道長は藤原行成と交流があり、その書には行成の影響も見られる。大半が漢文体で書かれているが、和歌の部分は仮名で記されている。内容は簡潔ながら誤字、脱字などが散見し前後の文が合わない箇所も見られる。2013 年に、現存する世界最古の直筆の日記として、ユネスコ「世界の記憶」に登録された。国宝。陽明文庫蔵。

藤原行成【ふじわらのこうぜい・ゆきなり】972-1027

小野道風の書を好み、和様の書を大成した人物とされ、小野道風・藤原佐理とともに「三跡」と称されている。その筆跡を「権跡」という。真筆に「白氏詩巻」が残されている。『源氏物語』が書かれたこの時代は、和歌の隆盛とともに仮名の文字も一気に発展したと考えられ、行成の書と伝えられている仮名の書も多くあるが、いずれも確証はない。行成の書流である「世尊寺流」は子孫に継承され、長く書の中枢を担った。「蓬萊切」「関戸本古今和歌集」などの伝称筆者とされる。

▶「白氏詩巻」平安時代・1018 年

赤紫・薄茶などの美しい染紙 9 枚に、白居易の『白氏文集』の詩 8 篇を書写したもの。寛仁 2 年、行成 47 歳の筆跡で、「寛仁本白氏詩巻」ともよばれる。その書風は女手の仮名と調和するかのように、小野道風に比べて細めの線で書かれている。行書を主体に草書を交え、洗練された和様の美しさが見られる。紙背の継ぎ目に伏見天皇の花押があり、遺愛の品であったことが示されている。国宝。東京国立博物館蔵。

ColBase：白氏詩巻

▶「蓬萊切」（伝）平安時代・11 世紀中頃

雲母を一面に撒いた雲紙に、長寿を祝う『拾遺和歌集』の 4 首と『後撰和歌集』の 1 首の歌を書いたもので、もとは巻子本であった。現在は 1 首ずつ分割されている。端正な字形と清らかな線質、それに文字を 1 字ずつ離して書く放ち書きに、ほどよい連綿を交えて書かれているため、初学用の手本として使われることが多い。伝称筆者は藤原行成とされる。重要文化財。五島美術館蔵。

五島美術館

▶「重之集」（伝）平安時代・11 世紀中頃

三十六歌仙の一人、源重之の家集。綴葉装の冊子本で、雲母を一面に撒いた雲紙に、抑揚の変化に富んだ運筆や流麗な連綿を用いて書かれている。前半は歌を 2 行書き、後半は散らし書きで書かれている。伝称筆者は藤原行成とされる。

文化遺産オンライン：重之集

▶「粘葉本和漢朗詠集」（伝）平安時代・11 世紀中頃

舶載の色とりどりの唐紙に、亀甲や鳥、蝶、雲鶴

TOP

などの文様を施している。上下 2 帖からなる粘葉装の冊子本で、藤原公任撰『和漢朗詠集』の完本である。漢字と仮名の両方を合わせて書いているため、手本としても用いられている。平安時代から鎌倉時代にかけて、多くの写本が作られ、手本のほか調度品、鑑賞用として贈られた。「粘葉本和漢朗詠集」もその一つである。伝称筆者は藤原行成とされる。「高野切第三種」と書風が類似している点から同一筆者とする考えもある。皇居三の丸尚蔵館蔵。

皇居三の丸尚蔵館：粘葉本和漢朗詠集

▶「関戸本古今和歌集」（伝）

平安時代 · 11 世紀中頃～後半

『古今和歌集』を書写した断簡で、もとは冊子本であった。加賀の前田家に伝来の後、名古屋の関戸家に入ったことからこの名でよばれている。鳥の子の染紙で、紫、緑、茶などの色が用いられている。収筆を大きく回転させたゆったりとした字形や、リズミカルな連綿、立体感のある墨の濃淡などが特徴である。伝称筆者は藤原行成とされる。

成田山書道美術館：24 松﨑コレクションの古筆（関戸本古今集）

▶「曼殊院本古今和歌集」（伝）平安時代 · 11 世紀後半

『古今和歌集』の写本で、京都の曼殊院に伝えられたことからこの名でよばれている。古筆の中では最も小さい巻子本だが、1 首を 4 行の行書きで書いているためゆったりとして見える。藍や薄藍の染紙に、墨の濃淡や線の太細の変化をつけて流麗に書かれている。伝称筆者は藤原行成とされる。国宝。曼殊院蔵。

▶「升色紙」（伝）平安時代 · 11 世紀後半

「継色紙」「寸松庵色紙」とともに「三色紙」とよばれ、平安時代を代表する散らし書きの名筆である。清原深養父の家集で、薄藍の染紙などが用いられている。もとは綴葉装の冊子本で、料紙がほぼ正方形で升のような形であることから「升色紙」とよばれている。「升色紙」は、隣り合う行を近づけたり、離したり、ときには重ねたりするなど変化に富んでおり、余白との調和が美しい。伝称筆者は藤原行成とされる。

ColBase：升色紙

▶「針切」（伝）平安時代 · 11 世紀後半

平安時代の歌人・相模の歌集『相模集』と、源重之の子の家集『重之の子の僧の集』の写本である。装飾加工していない素紙を用いている。二つの歌集を合わせた綴葉装であったが、現在は断簡である。二つの歌集は、詞書の有無や行間などの形式に違いがある。文字は小さめに書かれ、連綿を主体として書かれている。針のように細く鋭い線質から「針切」とよばれる。伝称筆者は藤原行成とされる。

成田山書道美術館：24 松﨑コレクションの古筆（まくりの断簡「衣手」- 針切）

藤原公任【ふじわらのきんとう】（966-1041）

平安時代中期から後期にかけての公家・歌人。漢詩、管弦楽、和歌の第一人者でもあり、『深窓秘抄』『和歌九品』『拾遺抄』などの歌書や撰集を残した。能書としても名高く、「藍紙本万葉集」「十五番歌合」「本願寺本三十六人家集」の伝称筆者とされる。しかし、現存している自筆の書は「稿本北山抄」のみである。

▶「稿本北山抄」平安時代 · 995 年～ 1006 年頃

『北山抄』は、藤原公任が朝廷の儀式に関して書いた有職故実の書であり、「稿本北山抄」は、公任唯一の自筆稿本である。全 10 巻からなり、現存しているのは、巻第 10 の 1 巻のみである。そのうちの 2 紙の紙背（「稿本北山抄紙背仮名消息」）には、公任に宛てたと推測される女性の消息（手紙）が書かれ、行の高低や優美な連綿など、散らし書きの芽生えを知る上で貴重な史料となっている。国宝。京都国立博物館蔵。

京都国立博物館：稿本北山抄巻第十

▶「藍紙本万葉集」（伝）平安時代 · 11 世紀後半

「桂本万葉集」「元暦校本万葉集」「金沢本万葉集」「天治本万葉集」とともに、平安時代の「五大万葉集」の一つである。伝称筆者は藤原公任とされているが、現在は世尊寺家 3 代目の藤原伊房の筆とするのが定説となっている。藍や浅葱色の染紙に書かれていることから「藍紙本」の名でよばれる。全体に銀の揉み箔が撒かれ、行の上下には界線が引かれている。力強く歯切れがよい運筆で書かれている。

ColBase：万葉集切（藍紙本）

TOP

▶「十五番歌合」（伝）平安時代・11 世紀後半

山部赤人や紀貫之など、各時代を代表する歌人 30 人の歌を 1 首ずつ選び、歌合わせの形式で左右 15 人ずつ配置して書写したものである。舶載の唐紙などを用い、大ぶりの草仮名で 1 首を 4 行に書く構成となっており、重厚で雄大な趣が感じられる。伝称筆者は藤原公任とされているが、現在は世尊寺家 3 代目の藤原伊房の筆とするのが定説となっている。

ColBase：十五番歌合断簡

▶「本願寺本三十六人家集」（伝）平安時代・12 世紀

三十六歌仙の和歌を歌仙別にし、粘葉装の冊子本にしたものである。白河法皇 60 歳の賀の調度手本として贈られたと考えられている。伝称筆者は藤原公任とされているが、20 人による寄合書で、現在は藤原定実や藤原定信らが筆者の一人と推定されている。各本には色鮮やかな染紙に文様が施された唐紙や下絵、箔、墨流し、継ぎ紙など当時の料紙装飾の技法がいかんなく駆使されている。平安時代を代表する豪華絢爛な作品で、京都の本願寺（西）に冊子として伝わったことから、この名でよばれている。また、料紙装飾に合わせるように、文字も線の太細や墨の濃淡、散らし書きを工夫して書かれ、料紙との調和・融合が見事である。

深窓秘抄【しんそうひしょう】平安時代・11 世紀

春・夏・秋・冬・恋・雑からなる、101 首の和歌を収めた秀歌集。縦 26.4cm 横 52cm の紙 16 枚を継いで 1 巻とし、現在も断簡されずに巻子本の状態で残されている。藍や紫に染めた繊維を漉き込んだ飛雲の料紙に、流麗な筆致で書かれている。国宝。藤田美術館蔵。

藤田美術館

源兼行【みなもとのかねゆき】（生没年不詳）

当時第一の能書と称され、宮廷内で数々の栄誉ある能書活動を行った。後冷泉・後三条・白河の天皇 3 代に渡り、大嘗会の悠紀主基屏風の色紙形の揮毫を行っている。平等院鳳凰堂の色紙形を揮毫したものが有名であり、その筆跡から「桂本万葉集」や「高野切第二種」などの古筆が兼行の筆とされる。

源俊頼【みなもとのとしより】（1055-1129）

管弦や和歌に優れ、『金葉和歌集』を撰集。能書であったらしいが、真跡は伝わっていない。「東大寺切」や「巻子本古今和歌集」「元永本古今和歌集」などの伝称筆者とされる。

▶「東大寺切」（伝）平安時代・1120 年

「三宝絵詞断簡」として伝えられている。『三宝絵』は 984 年に、源為憲が尊子内親王に贈った仏教説話集である。絵と文章からなっていたが、絵は散逸し、詞書のみが伝わっている。源俊頼を伝称筆者とするが、確証はない。各行に界線が引かれ、文体は平易な漢字仮名交じり体で書かれていることから、漢字仮名交じり文の発展をうかがうことができる。この頃には舶載の唐紙のほか、和製の唐紙も作られており、「東大寺切」は亀甲や唐草、七宝の文様を雲母で刷り出した和製の唐紙に、軽快な運筆で書かれている。

ColBase：三宝絵詞断簡（東大寺切）

▶「巻子本古今和歌集」（伝）平安時代・12 世紀前半

『古今和歌集』を巻子本に書写したことからこの名でよばれている。色替わりの染紙に雲母刷りと空刷り（蠟箋）で、文様を刷り出した料紙を使用した調度手本である。仮名序の完本 1 巻と、巻第 13 の残巻や断簡が現存する。伝称筆者は源俊頼だが、書風などから藤原定実の筆であると推定される。

文化遺産オンライン：古今和歌集切（巻子本）

▶「元永本古今和歌集」（伝）平安時代・12 世紀

制作された当初の形がほぼそのまま残っている、最も古い『古今和歌集』の写本として大変貴重な作品である。もとは紐で綴じた冊子本で、上下の 2 冊で構成されている。上巻の最後に「元永三年七月廿四日」と日付が記されていることから、「元永本」とばれている。舶載または和製の唐紙と箔で装飾された紙が見開きで交互になるように構成されている。見開きごとに書き方が異なり、漢字と仮名を調和させたり、散らし書きも見られる。伝称筆者は源俊頼だが、書風などから藤原定実の筆であると推定される。国宝。東京国立博物館蔵。

ColBase：古今和歌集（元永本）

TOP

元暦校本万葉集【げんりゃくこうほんまんようしゅう】

平安時代・11 世紀後半

「桂本万葉集」「藍紙本万葉集」「天治本万葉集」「金沢本万葉集」とともに、平安時代の「五大万葉集」の一つである。これら五つの『万葉集』写本の中では最も歌の数が多く、能書による寄合書になることなどから、重要視される写本である。藍や紫に染めた繊維を漉き込んだ飛雲の料紙に淡墨の界線を引き、万葉仮名と仮名を合わせて書かれている。

ColBase：元暦校本万葉集

筋切・通切【すじぎれ・とおしぎれ】

平安時代・12 世紀

「古今和歌集」を書写した断簡で、もとは粘葉装の冊子本であった。染紙や飛雲紙などの料紙に金銀の揉み箔を一面に撒き、銀泥で縦に線を引いているので「筋切」とよばれる。また、料紙の裏に篩の目のような文様があることから「通切」ともよばれる。縦長な字形で簡略な女手を主体として繊細に書かれ、優美な姿を見せている。筆者は藤原佐理や藤原行成ともいわれるが、時代から見て確証はなく、藤原定実とする説もある。

ColBase：古今和歌集巻第十一断簡（筋切）

ColBase：古今和歌集巻第十七断簡（通切）

天治本万葉集【てんじぼんまんようしゅう】

平安時代・1124 年

「桂本万葉集」「元暦校本万葉集」「藍紙本万葉集」「金沢本万葉集」とともに「五大万葉集」と称される。巻 13 が完本で残されており、巻末に「天治元年」の奥書があることから、この名でよばれている。仙花紙という料紙に界線が引かれており、真名（漢字）は一枠に 1 行、仮名は一枠に 2 行書いているところが特徴的である。「天治本万葉集」は学問上の必要から書写されたものであるといわれ、豪華さには欠けるものの制作年の分かる貴重な史料である。

ColBase：天治本万葉集切

金沢本万葉集【かなざわぼんまんようしゅう】

平安時代・12 世紀

金沢の前田家が所有していたことから「金沢本万葉集」とよばれている。雲母で刷りだした文様が両面に施された豪華な和製の唐紙で、「元永本古今集」や「本願寺本三十六人家集」のものと同一である。歯切れのよい速書きで、字形にとらわれることなく躍動的に書かれている。「桂本万葉集」「元暦校本万葉集」「藍紙本万葉集」「天治本万葉集」とともに「五大万葉集」と称される。国宝。皇居三の丸尚蔵館蔵。

ColBase：金沢本万葉集

久能寺経【くのうじきょう】平安時代・1141 年以降

静岡県静岡市久能山にあった久能寺に伝わった装飾経。『法華経』などを合わせた 30 巻の荘厳経で、奥書署名により藤原定実らによる寄合書で書かれた結縁経であることが分かっている。金銀の箔による装飾が特徴的であり、切箔や砂子、野毛を撒き、界線は銀泥などで書かれている。蓮や鳥、蝶などの唐草の文様が散らされており華麗な装飾経である。

ColBase: 法華経（久能寺経）

平家納経【へいけのうきょう】平安時代・1164 年

『法華経』を主体とした経典が書かれ、平清盛の自筆の願文 1 巻を合わせ、平家の栄華を今に伝えている。経典に施された装飾は豪華絢爛で、当時の料紙技巧を駆使している。平安時代末期は装飾経や絵巻が流行した。「平家納経」は、装飾経の代表作である。

ColBase：平家納経（模本）

源氏物語絵巻【げんじものがたりえまき】

平安時代・12 世紀

紫式部が著した『源氏物語』を絵画化した絵巻である。『源氏物語』54 帖のうちの一部分が現存している。ぼかし染や金銀泥で描かれた下絵、梅の花の型抜きなど、多様な技巧が施されている。金銀の砂子・切箔・破り箔・野毛などが撒き分けられた豪華な料紙であり、「久能寺経」に近い装飾技巧と見られる。書は、藤原伊房や藤原雅経、藤原教長、寂蓮らと伝えられているが、確証はない。国宝。

文化遺産オンライン：源氏物語絵巻（徳川美術館）

徳川美術館（名古屋）

五島美術館

TOP

書論 **藤原伊行『夜鶴庭訓抄』** 平安時代・12 世紀

日本に現存する最古の書論。著者の藤原伊行は世尊寺家の 6 代目である。世尊寺家は書の中枢を担っていたため、子孫に書を伝えるために本書が書かれたと考えられている。書法の習い方や書を書く際の心得、筆墨硯紙のことなどを簡潔に書いている。

書論 **藤原教長『才葉抄』** 平安時代・12 世紀

藤原教長が、世尊寺家の藤原伊経に語った書法の口伝の内容を、後日伊経がまとめたもの。実技的な解説を主体とし、心得などさまざまなことが書かれている。三跡の書や藤原忠通の法性寺流などを例に挙げて説明をしている。

藤原俊成 【ふじわらのしゅんぜい・としなり】

1114-1204

俊成は平安時代後期から鎌倉時代初期の公家・歌人で藤原道長の玄孫。後白河法皇の命を受けて『千載和歌集』を編纂した。真筆に「日野切」などが現存している。子の藤原定家とともに国学者としての業績が大きい。

▶「日野切」 鎌倉時代・1188 年

素紙（加工していない漉き上げたままの紙）に『千載和歌集』を自筆で書いたもの。もとは綴葉装の上下 2 冊の冊子本であったが現在は断簡となっている。俊成の書は、「俊成の奇癖」とまでいわれた強く突き刺すような力強い書風が特徴である。

ColBase：千載和歌集断簡　日野切「いましはし」

西行【さいぎょう】1118-1190

平安時代の歌人、僧侶。鳥羽上皇に仕える北面の武士であったが、23 歳のときに出家した。西行は和歌で人々を魅了し、『新古今和歌集』の代表歌人の一人となった。真筆に「一品経和歌懐紙」などが現存している。

▶「一品経和歌懐紙」 平安時代・1181 年頃

「一品経和歌懐紙」は西行のほかに 14 点現存するが、いずれも和歌 1 首を 3 行で書いている。平安時代末期から鎌倉時代にかけて流行していた重厚な書風に比べ、細くしなやかな線質で書かれている。

文化遺産オンライン：一品経懐紙（西行、寂蓮等十四枚）

▶「一条摂政集」（伝） 平安時代・12 世紀

一条摂政とよばれた藤原伊尹の家集。伊尹は優れた歌人であり、「小倉百人一首」にも歌が採られている。大和綴じの冊子本であるが、本が小さいため全体的に文字は小さく、行は短めで傾いている部分が多く見られる。穂先の鋭さと弾力を用いて自然体で速く書き流している。「中務集」と書風が酷似しており、伝称筆者は西行とされる。

▶「中務集」（伝） 平安時代・12 世紀

平安時代中期の女性歌人で、三十六歌仙の一人である中務の家集の写本である。綴葉装の冊子本で、楮紙に書かれている。平安時代中期の仮名に比べ、直線的で鋭い線質が特徴であり、紙面を切り裂くように書き進められている。力強く颯爽としていて、伸びやかな趣である。伝称筆者は西行とされる。出光美術館蔵。

出光美術館

TOP

藤原定家【ふじわらのていか・さだいえ】

1162-1241

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての公家・歌人。『小倉百人一首』の撰者や『源氏物語』『土佐（左）日記』などの古典の書写・注釈に携わるなど、歌人・学者としての業績が大きい。また、1180 年から 1235 年にわたる日記『明月記』も著名である。書では、「定家様」とよばれる線の太細の差が大きく、連綿や傾きが少ない書風が特徴である。この書風は、正確に書写をすることを重要視したためとも考えられている。

▶『土佐（左）日記』鎌倉時代 · 1235 年

紀貫之の『土佐（左）日記』を書写した写本。約 16cm 四方の冊子本に書かれている。最後には紀貫之の筆跡が臨書され、貫之の実際の書きぶりをうかがうことができる。国宝。前田育徳会蔵。

▶『小倉色紙』鎌倉時代

小倉山荘色紙ともいい、「百人一首」を藤原定家が色紙形に 4 行で書いたもの。現存する色紙の多くは放ち書きで書かれており、連綿は少ない。線の太細の変化が激しく、字形は扁平である。

ColBase：小倉色紙「あさちふの」

藤原雅経【ふじわらのまさつね】1170-1221

藤原（飛鳥井）雅経は、和歌を藤原俊成に学び、藤原定家とともに『新古今和歌集』の撰者としても知られている。平安時代末期から鎌倉時代初期に流行した、優雅な書風を継承しながらも、法性寺流による覇気のある、豊潤な筆致が特徴の能書である。「今城切」などの著名な古筆の伝称筆者としても知られ、真筆では「熊野懐紙」などがある。

▶「熊野懐紙」鎌倉時代 · 1200 年

後鳥羽天皇に従って参加した熊野詣の際の和歌会で詠んだ歌を清書したもの。線は太く、豊潤な力強い書きぶりが特徴である。「熊野懐紙」は各歌人が詠んだ歌を自書しており、35 点が現存し、後鳥羽上皇をはじめ 14 人の筆跡が確認されている。重要文化財。

ColBase: 熊野懐紙

伏見天皇【ふしみてんのう】1265-1317

後深草天皇の皇子。能書としても著名で、藤原行成の書を学んだ。平安朝の書風を主体としながら、厚みのある線が特徴であるが、伸びやかで明るさがある。鎌倉時代中期から南北朝時代にかけて、天皇家の人々が書いた明るく伸びやかな表現の書を「宸翰様」とよぶ。伏見天皇の系統では尊円親王らが能書として知られ、江戸時代に御家流として続く根底を築いた。

▶「広沢切」鎌倉時代 · 14 世紀

伏見天皇の家集の断簡。晩年の書とされており、もとは巻子本であったが現在は断簡となっている。文中に添削の跡などが見られ、草稿であったことを示している。平安時代の和様の趣を残しつつ、線は太く安定した表現を見せている。

ColBase：伏見天皇御集（広沢切）

宗峰妙超【しゅうほうみょうちょう】1282-1337

鎌倉時代末期から南北朝時代の臨済宗の僧。鎌倉時代、栄西らによって中国から臨済宗がもたらされ、鎌倉幕府が禅宗を重視したことで禅僧の書である墨跡が広まった。中国は宋の時代にあたり、禅に精通していた黄庭堅の書風の影響を受けていることがうかがえる。大徳寺を開山した宗峰妙超は、花園上皇から与えられた号の「大燈国師」でよばれることも多い。一休宗純とともにその書は独自の書風を確立し、人気を得た。

▶「看読真詮榜」鎌倉時代 · 14 世紀

一般には「看経榜」ともよばれる。迫力がある堂々とした書風から宗峰妙超の墨跡の中でも代表作とされ、その書風は、黄庭堅の「松風閣詩巻」や「伏波神祠詩巻」の影響が見られる。国宝。真珠庵蔵。

TOP

尊円親王【そんえんしんのう】1298-1356

能書として名高かった伏見天皇の第6皇子。出家し、青蓮院の門跡（住職）となる。藤原行成を祖とする能書の家、世尊寺家より書を伝授された。のちに、初心者の心得などをまとめた『入木抄』を著す。青蓮院では、その後書に優れた門跡が輩出され、「青蓮院流（尊円流）」とよばれるようになる。江戸時代になると、御家流として広く知れわたった。

書論 尊円親王『入木抄』南北朝時代・1352年

後光厳天皇の手習いの指導のために贈った指南書。全20項目から成り、初心者の心得・方法などが具体的に述べられるとともに、尊円親王の書道観なども説かれている。

絶海中津【ぜっかいちゅうしん】1334-1405

臨済宗の僧。漢詩にも優れ、禅僧によって書かれた五山文学の基礎をつくったと称されている。禅の心得を牧童と牛の物語に例えて説いた詩「十牛頌」が知られている。その書風からは、元の趙孟頫の趣が感じられる。

一休宗純【いっきゅうそうじゅん】1394-1481

臨済宗の僧。号を一休、諱を宗純とした。禅林における階級観を否定し、禅の根本を説いて本格的なあり方を追究した。実直な独自の世界で形成された一休宗純の書は、豪快で力強い表現である。「尊林号」や「七仏通戒偈」に見られるように、筆の穂先が割れた線を巧みに操った迫力のある書が魅力的である。

ColBase：一行書「教外別伝不立文字」

TOP

本阿弥光悦【ほんあみこうえつ】1558-1637

刀剣の鑑定や手入れを専門とする家に生まれ、安土・桃山時代から江戸時代初期にかけて、書画や漆芸、陶芸などさまざまな分野で活躍した。豪華絢爛な桃山文化を引き継ぎ、寛永年間（1624-1644）には、公家や武士、僧侶、町衆などの垣根を超えた文化・芸術の興隆を生みだし、寛永文化が花開いた。当時活躍していた俵屋宗達ら絵師による華やかな下絵と、光悦の書が混然と調和した作品が多く残されている。書では近衛信尹・松花堂昭乗とともに「寛永の三筆」と称される。代表作に「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」や「舟橋蒔絵硯箱」などがある。

ColBase：舟橋蒔絵硯箱

▶「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」江戸時代・17 世紀

全長 1356.0cm もの長い巻子本である。巻頭から金銀泥でさまざまな姿で描かれた鶴の姿に、俵屋宗達の手腕を見てとることができる。絵の間に生じた空間に、光悦が藤原公任撰『三十六人撰』にもとづいた三十六歌仙の和歌を巧みに散らし書きしている。

京都国立博物館：鶴下絵三十六歌仙和歌巻

近衛信尹【このえのぶただ】1565-1614

安土・桃山時代から江戸時代初期にかけて活躍した能書。本阿弥光悦・松花堂昭乗とともに「寛永の三筆」と称される。和歌や連歌を得意とし、茶の湯の世界でも活躍した。摂関家の嫡男として活躍し、青蓮院流や藤原定家の書に影響を受けている。数多くの作品を残し、その中でも自然な流れで書かれた大字の仮名が特徴である。代表作に、「源氏物語抄」や「檜原図屏風」「いろは屏風」などがある。

▶「檜原図屏風」江戸時代・16 世紀～17 世紀

「初瀬山夕越え暮れて宿問へば（三輪の檜原に）秋風ぞ吹く」という和歌の「三輪の檜原に」の部分をあえて書かず、水墨画に置き換えた表現をしている。水墨画は長谷川等伯と考えられている。

文化遺産オンライン：紙本墨画檜原図　近衛信尹の賛がある　六曲屏風

烏丸光広【からすまるみつひろ】1579-1638

安土・桃山時代から江戸時代初期の公家で、細川幽斎から古今伝授を受けるなど二条派歌学を究める。豊臣秀吉や徳川家康ら武将とも親しく、公家と武家とをつなぐ存在でもあった。持明院流の伝統を学んだ後、古筆や墨跡などの影響を受け、やがて伝統に束縛されない、光広流ともいえる独自の書風を確立させた。

ColBase：東行記

松花堂昭乗【しょうかどうしょうじょう】

1584-1639

安土・桃山時代から江戸時代初期にかけて活躍した僧・能書。石清水八幡宮の僧であった。本阿弥光悦、近衛信尹とともに「寛永の三筆」と称される。青蓮院流や空海の大師流の書を学び、自らの書風を確立させた。穏やかな書風は人気を集め、滝本流・松花堂流とよばれて広く愛好された。代表作に「三十六歌仙帖」がある。

▶「三十六歌仙帖」江戸時代・17 世紀

さまざまな文様を型摺りにし、金銀泥で下絵を施した色紙に三十六歌仙の歌を一首ずつ散らし書きにしている。平安・鎌倉時代の古筆に影響を受けた昭乗らしい書と下絵との融合が美しい表現となっている。

ColBase：三十六歌仙帖

独立性易【どくりゅうしょうえき】1596-1672

中国の明時代末期に生まれ、明が滅び清が起こるにあたり長崎に渡来した。黄檗宗の禅僧であり、黄檗宗の開祖である隠元隆琦の弟子である。日本に明風の書法や水墨画、篆刻を伝え、江戸時代における唐様の書の流行の根源となった。また、医学に優れ、医師としての活躍も知られる。

北島雪山【きたじませつざん】1636-1697

独立性易の門人であり、江戸時代の唐様の能書の代表とされる。幕府の儒学奨励の政策などにより、中国文化の風潮に傾き、明風の書を体得した黄檗僧らによって唐様の書がもたらされた。力強い雄渾な唐様の書は、儒学者や文人などの知識人の間で和様の書と流行を二分する勢いとなった。門人に、後に唐様を江戸に広めた細井広沢などがいる。

TOP

細井広沢【ほそいこうたく】1658-1735

儒学に秀で、徳川光圀の儒臣として仕えた。書画や篆刻、和歌、さらに兵学や天文学などもよくし博学であった。北島雪山の門人であり、歴史や理論などの原理をもって多数の書論を著し、唐様の書を広めた功績が大きい。

近衛家熙【このえいえひろ】1667-1736

江戸時代中期に中御門天皇の摂政や宮中の要職などを務めた。書や茶道をよくし、画や華道などにも優れた当時の宮廷文化の第一人者として評価されている。藤原北家の家柄で、御家流が台頭していた江戸時代に臨模などの手法を用いて平安時代の仮名を習熟し、大きな影響を与えた。

白隠慧鶴【はくいんえかく】1685-1768

臨済宗の僧。幼くして仏教の道に足を踏み入れ、15 歳のときに出家した。出身地の沼津をはじめ諸国を遍歴し修行に専念した。鎌倉・室町時代に五山を中心に流行していた禅を再興させた功績が大きい。白隠は禅の中にあって、1 万点以上の禅画や墨跡を残しており、その個性的な画風や肉太な書が魅力的である。

池大雅【いけのたいが】1723-1776

文人画に優れ、与謝蕪村とともに文人画の大成者として評価されている。蕪村との合作に「十便十宜図」がある。書は、幼くして各書体をよくし、独自の世界を切り開いた。ゆったりとした趣のものや自由奔放な書風など多様であるが、筆勢は迫力に富む。

良寛【りょうかん】1758-1831

曹洞宗の僧。越後国（新潟県）出雲崎に生まれ、幼い頃から学問に親しみ、仏教の修行に専念した。その後、諸国を巡る中で和歌の影響を受け、書では「秋萩帖」を主な手本とし、自らの書風に昇華させた。代表作に「天上大風」が挙げられ、生涯多くの作品を残している。特に書簡が多く、その内容は人々に親しまれた良寛の人柄が表れている。

良寛記念館

ColBase：和歌「あきのひに」

▶**「天上大風」**江戸時代・18 世紀 -19 世紀

良寛の特徴である、細く柔らかい線で書かれている。子供が凧上げをしている際に、凧に何か書いてほしいとせがまれて書いたというエピソードが残っており、良寛の人柄を垣間見ることができる。

巻菱湖【まきりょうこ】1777-1843

儒学や詩文に優れ、書で才能を開花させた。特に楷書に精通し、門人に下町の庶民が多かったため人々の好みに広く浸透した。その影響は大きく、世に広く書の手本として用いられ、明治時代の学校教育の教科書の多くは巻菱湖の書流の書であった。市河米庵、貫名菘翁とともに「幕末の三筆」と称される。

貫名菘翁【ぬきなすうおう】1778-1863

江戸時代末期の文人画の巨匠とたたえられている。幼少より、書画や漢籍に専念し、17 歳のときに空海の「風信帖」と出会うことで書に心酔する。唐様と和様を融合させた独自の格調高い書風を築きあげた。明治時代以降、日下部鳴鶴らに評価されたことによりその名が広まった。巻菱湖、市河米庵とともに「幕末の三筆」と称される。

市河米庵【いちかわべいあん】1779-1858

書や詩文に優れ、特に隷書や楷書を得意とした。中国の古典や明・清時代の書を学び、21 歳のときに書塾「小山林堂」を開き、書を生業とした。力強い唐様の書が特徴である。『墨場必携』を著すなど、後世に功績を残した。巻菱湖、貫名菘翁とともに「幕末の三筆」と称される。

TOP

巌谷一六【いわやいちろく】1834-1905

官僚や能書として知られ、日下部鳴鶴、中林梧竹とともに「明治の三筆」と称される。官僚の道では数々の職を歴任、書記として公文書の浄書に携わるなどした。巻菱湖や趙孟頫、顔真卿の書法に傾倒したが、1880年に来日した楊守敬によりもたらされた、中国の六朝書の拓本などからその教えを受け、金石学を追究し独自の書風を確立した。

中林梧竹【なかばやしごちく】1827-1913

書や画に優れ､絵画や水墨画も多く残されている。巌谷一六、日下部鳴鶴とともに「明治の三筆」と称される。山内香雪、香雪の師である市河米庵らに書を学び、清に渡り潘存に師事した。六朝書の書法を追究し、碑の拓本を日本に多くもたらした。帰国後は副島蒼海（種臣）の計らいにより、東京銀座の洋服店に住み続け書に専念した。書は各書体に優れ、特に長鋒や柔毫の筆を駆使した規模の大きい雄渾な作品を多く残している。著書に『梧竹堂書話』がある。

小城市立中林梧竹記念館デジタルミュージアム

日下部鳴鶴【くさかべめいかく】1838-1922

官僚や能書として知られ、巌谷一六、中林梧竹とともに「明治の三筆」と称される。太政官書記を務めたが、大久保利通の暗殺を機に辞職し、書に専念する。巌谷一六と同じく、巻菱湖や貫名菘翁らの書を学んだが、楊守敬によりもたらされた六朝書の拓本などの金石学に傾倒する。清に渡り、呉昌碩などの文人や金石学者と交流し、得た成果をもとに日本の書法を改め六朝書道を定着させた。書の鑑賞や研究、出版にも熱心に取り組み、近代書道に大きな功績を残した。